

# 別府の新しい風

— 「学生とまちづくり」シンポジウム —

別府大学文学部人間関係学科

篠藤明徳(編)

## I 中心市街地で新しいまちづくり

別府の街で、今、新しい風が吹き始めています。確かに、駅前に立つと、全国同様、寂れた風景が目飛び込んできます。また、アーケードの商店街を歩くと、空き店舗が目につきますし、全国どこでも見られる、活気を失った中心市街地の姿です。街の人びとに聞くと、「昔は溢れるばかりの観光客で街は活き活きしちよった」といいます。では、どこで新しい風が吹いているのでしょうか。

日曜日の午前中、アーケードの一本後ろの路地裏を、旗を先頭にハンドマイクを持った人に連れられて、奇妙な一群が人ひとりようやく通れる路地を歩いています。これが、今話題の別府路地裏散歩です。この企画を2年間にわたって、ボランティアでやっている竹瓦倶楽部の人々は、また、「別府八湯メーリング・リスト」の中心的メンバーとして、全国だけではなく、世界にも「別府の湯」大好き人間のネットワークを500人ほど作っています。今、そのネットから軽食店が生まれ、スナック(といっても、本当はメール・リンクの仲間が集うサロンです)、居酒屋、カクテル・バーがオープンされています。毎日100本近くのメールが飛び交って、いろいろなまちづくりアイデアが誕生している様子は、驚きです。



さて6月30日、その活動の中心地、今や別府のまちづくりのシンボルになった竹瓦温泉の2階で「学生とまちづくり」シンポジウムが開かれました。会場には、別府大学の学生だけではなく、昨年度開校した立命館アジア太平洋大学の学生も交え、100名を超える人々が集まりました。企画自体は、別府大学文学部人間関係学科の1年生を対象にした「地域社会学」の授業の一環として行われたものです。そこで始めに、なぜ、人間関係学科が街を舞台にしたそのような授業を始めているのかを説明します。

## II 「近代化」の行き詰まり

昨年創設された人間関係学科は、社会学、心理学、教育学の3コースで構成され、現代社会の中で複雑化し、脆弱になる人間関係をもう一度見つめ直すことを目的としています。こうした新しい学の取り組みは、全国でも起こっていますが、私たちの取り組みでユニークな点は次の2点だと私は考えています。

まず第1は、人間関係の問題を地域社会との関連で捉えていることです。つまり、今日における人間関係の崩壊は「近代化」の問題であり、近代化は核家族化、地域共同体・伝統的価値観の崩壊、貨幣の物神化などを引き起こしてきました。世上言われる情報革命やグローバル化は、近代化のベクトルを最大化するという面で考えると、簡単に楽観できるものではありません。しかし、そうだからといって、過去の幻影(例えば、国家伝統の見直しなど)に遡れる事はもはやできません。そこで、本学の人間関係学科では、こうした近代化の諸現象(成果、課題も含めて)を地域社会の中で、新しい形で編み直すことはできないかという問いかけを行っています。それぞれの学に立脚しながら、地域社会をベースにした新しい人

間関係、生き方、関わり方を思考しようとしています。

## III 地域がキャンパス

第2は、地域社会に積極的に関わりながら、実践的に物事を考察し、考察するだけではなく、地域社会の一員としてその問題・課題に関わっていかうということです。今、学校で総合的学習の時間が設けられようとしています。知識伝達一辺倒のこれまでの殻を打ち破り、地域社会にある、生きた生活の中から編み出した知恵、生活の場として歴史的に形成されてきた景観・自然環境から学んでいこうとしています。これは、近代化の現象としての「学校制度」という枠内での教育体系が限界に来ていることを示しています。であれば、大学はこうしたものと無縁なのでしょうか。そのはずはなく、大学も同様の課題を抱えています。

よく「社会に開かれた大学」というとき、多くの大学では、「大学には社会にない貴重な知恵があり、それを学生だけではなく、社会にも与えよう」と公開講座や出張授業、産学共同に取り組んでいます。その一方で、最近の学生は学力不足だ、好奇心が足りない、と不平を言っています。しかし、こうした姿勢には、あくまでも自己の専門性の上位を疑わず、他を睥睨する見方がないとはいえません。こうした「専門性の神聖化」こそ近代の抱える病の一つであり、今日の危機の原因のひとつではなかったのでしょうか。私たちは、地域社会から学ぶ、生活世界の中で学生を育てようと、地域に関わっています。新しいスローガンは「地域がキャンパス」。もちろん、微力ながら私たちの限定された専門知識が必要であれば、役立てていただきたいと考えています。こうした相互協力の場こそ新しい人間関係を育む場にもなり得るのではと期待しているわけです。

## IV 別府の街を舞台に「地域社会学」を学ぶ

このような問題意識を持ちながら、新学科の教育に取り組んでいますが、まず、1年生対象の講義「地域社会学」を学科のガイダンス授業と位置付け、3人の教授が上記のような趣旨で、まちに出て教育の場を作っています。実のところ、全く

新しい試みで右往左往しながらやっているというのが実状です。秋田教授は鉄輪地区、富吉教授は別大周辺、そして、私が中心市街地で、こうした試みを展開しています。それぞれの視点、方法は異なっていますが、とりあえず、地域社会に出て、そこに生きる人々、訪れる人間たち、町並み・環境を形作っている歴史や自然、社会・経済の課題などを体験、観察することから始めようと、出かけています。

## V 40名の学生が路地裏散歩に参加

私の担当する中心市街地、いわゆる別府駅前のエリアでは、約40名の学生が取り組んでいます。まず、路地裏散歩というユニークなまちづくりを行っている人々と共に、早速ウォーキングに参加してみました。市外から大半集まっている学生にとって、日曜日の朝、中心市街地の路地を歩くという体験は、とても新鮮だったようです。そして次に企画したのが、6月30日に開催されたシンポジウム「学生とまちづくり」でした。木造2階の大きな建物は、道後温泉を想起させる建物ですが、2階は、地区公民館を兼ねています。地域にしっかりと根を張りながら息づいてきた古い建物の中、冷房、扇風機もなく、暑い夏の土曜日に開催したシンポジウムは、テレビ、新聞各社も駆けつけ盛況でした。

シンポジウムは、まず、まちづくりに関係する人々から、その体験や制度的背景などを説明していただきました。後半は、私が司会を担当し、旅館業者、飲食業者、自治会、商店街をそれぞれ代表する方々と中心市街地の課題と今後の展望を話し合いました。会場から学生の発言もあり、行政関係者の発言ありで盛り上がったものになりました。

この報告は、シンポで問題提起をしてくださった4人の講話を、学生が編集して掲載するものです。4人の方々は異口同音に、まちづくりはひとづくり、生活と歴史に根ざしたまちづくりを強調されました。「レトロの街」「癒しのまち」「路地裏のある街」、こうしたコンセプトがインターネットと言う新しい媒体を通して人々を結び付けようとしています。先ほど述べた「地域社会の編み直し」とどこか通じているかもしれません。

## 「竹瓦倶楽部の挑戦」

竹瓦倶楽部代表  
野上泰生氏



### (1) 竹瓦倶楽部とは

1、竹瓦倶楽部・・別府は高度成長期にかけて観光客が押し寄せてきてどんどん発展していったが、中心市街地から港や市役所が移転し、次第に寂れていった。その中で98年に地元住民がなんとかしようとして立ち上がり、残っていた竹瓦温泉を中心とした町づくりをしてみようと、始めたのが竹瓦倶楽部だ。地元住民を中心として約300人の会員がいるが、会費は500円で実際は20~30人が活発に活動している。なぜ竹瓦温泉をシンボルとして使ったかという、竹瓦温泉が壊されてしまうという話が出て、それでなんとかしなきゃ、と、98年9月に、ヒットパレードクラブで『竹瓦フォーラム』を筑紫哲也氏を招いて開いた。そこで竹瓦温泉という宝があるんだからこれを磨きあげて地域おこしをしたらどうか、と「竹瓦温泉」は使われた。

2、活動の目的・・目的は竹瓦温泉の修復、保存。もう一つはこのエリアをどのように活性化していくかということだ。活性化というのは、観光客がどんどん来るのではなく、ここに住んでいる住民が楽しく生活できればいいじゃないか！という所が半面ある。その為にどんな環境にならなきゃいけないのか、ということを倶楽部では常に考えている。

3、主な歴史と活動・・98年12月に竹瓦倶楽部はこうして発足した。半年後、町のことをいろいろ調べ、今までこの地域を調べていた方たちに相談し、この町を一回歩いてみよう、ということにな

った。この町にどういうものが残っているのか、それにはどういう謂れがあるのか、どういう歴史があってどんな人が来たか、などを一度洗い出してみようということになり、参加した人によい所と悪い所を指摘してもらおう、ということで99年7月に『別府物語ウォーキングツアー竹瓦界隈路地裏散歩』というのを始めた。毎週日曜日にやり、毎回30~40人の参加者が集まった。最初は悪いという所を聞いて、それを蓄積してやめようとしていたが、やめないで！の声が上がり夏休み後は月2回ずつという形でそれは今も続いている。今までのべ60回、1400人を案内している。悪い所を聞くはずだったのに、参加者の多くはよい所ばかり言う。今まで気付かなかったよい所を聞いて参考になっている。2000年に入り、町歩きの方で注目を集めている、じゃあまたなんかしよう！今度は商店街にアクセスしてみよう、ということで、『浴衣deピンポン』という企画を立ち上げた。これは商店街で浴衣で卓球をするといった参加型のイベントで低予算でできた。これがうけて全国放送になった。その調子で2,000年10月に地域文化の発信ができないかということで『路地裏文化祭』というイベントを企画した。『裏が表の10日間』というキャッチフレーズをもとに、ウォーキングエリアのお店が、文化祭をやっている期間に普段しないような変わったことをする、というものだ。その中で特にねらったのは、その地域の生活文化と観光客がいかに融合していくか、融合していく中で地域の本当の生活を知ってもらって、それを外に向かって情報発信していく。この町の本当のよさというものを、こういうイベントを通じて発信してみようということだ。

4、竹瓦倶楽部の町作りの原則・・（活動の自由を確保）

『頼まず・頼らず』ということで政治的活動は行わず、補助金には頼らないことにしている。3年間やってるが、最初に集めた会費15万円ですべて活動を運営している。新聞や雑誌にもかなり出ているので、投資効率がよい倶楽部といえる。

### (2) 現在の活動

竹瓦温泉の修復が検討段階に入っている。市のほうが、最初は壊すと言っていたが最近になって壊すのは無理だな、という考えに変わってきてい

る。しかしまだ気をゆるめてはいけない。これからも早急な修復を呼びかけなければいけない。町歩きの方はいろいろな人たちを案内した結果、一緒に活動する仲間が増えてきている。竹瓦から始まった町歩きが、今いろんな地域に波及して『八湯ウオーク』ということで、鉄輪とか山の手とかで同じように行われている。別府観光の新しいメニュー的なものにはなっているが、なかなか観光メニューにはなり得てない。とにかく情報発信をしてきた。メディアを飽きさせないように工夫して情報発信をやってきた。情報発信が武器！『浴衣deピンポン』は、それを通して『ママさんガイド』というのができた。いま30人ほどいて、一緒に町案内をしたりしている。『路地裏文化祭』は新聞でも結構とりあげられたし、これからも参加する人達を増やしていきたい。そういう意味でもネットワークを広げていきたいと思う。

### (3) 今後の活動

今までの活動記録が残ってないので、本を出す。季刊の地域雑誌を出して、地域の歴史や生活文化を記録としてどんどん残していこう！と思っている。それで、活動しているメンバーを充実させ、地域のコンセンサスをより深めていけるといい。あとは、より地域に密着した活動をやっていこうと思っている。情報発信をどんどんやって、地域の文化をどんどん出していく、ということ。今までみたいな、テーマパークなどの素材めがけてやってくる観光というのはもう古い。これからはその地域の文化とかを求めて来ると思う。いかにその地域のオリジナルな文化を表に出し磨きあげていくか、そして住民がそのことをしっかり認識しているか。別府には特徴的な文化があるのに住民はそれに気付いてない。それをいかに気付かせるか、それを引き続きやっていきたい。今すすめているのが、商店街を中心に活性化活動である。しかし、まちづくりはエリアごとですすめていかなければならないので、しぼられたエリアに住む人達全員でまちづくりができるように、これからも仕向けていきたいと思う。これが竹瓦倶楽部の挑戦です。

## 「歴史の香る路地裏」

平野資料館長

平野芳弘氏



### 1 「おかわりありませんか」

・変わらないことの大切さ

世の中には「変わらない努力をしている人」が多くいます。たとえば、中国の人で不老長寿の薬を世界中に探し求めたり、女性の人が美容のために体重を維持したり、持病があるためにそれ以上体が悪くならないよう気をつけたりとか。環境を守ること、町並みを保存することなど、「変わらないことの大切さを」このウォーキングでいろいろな方から教えて頂きました。今の世の仕組みでは新しい物を作る以上に、現状を残すことの方が数倍もエネルギーが必要です。私の本職は、道路やダムを必要に応じてつくることですが、常々から現状を残すことは大変なことだと実感しています。

しかし、白杵・杵築さらに日田等は歴史的な町並みが昔のままに変わらずに残っている場所もあります。

・30年前からの資料集め

私は、福岡での学生時代に唯一生まれ故郷の別府から離れただけで、あとはずーと別府で暮らしています。そして20歳位の時から急速に変わっていく別府のために何かできないかと思い、30年近くの間、昔の写真やポスター等を少しずつですが集めてきました。今では収集した資料は約2000点を超えています。この資料を活用して別府のまちづくりに役立てていきたいと考えています。

「おかわりありませんか」というあいさつ言葉をこれからも大切に使用していきたいと思っています。

## 2 「あんなの頭の方がずーとはずかしい」

### ・人情通り

7～8年前に、NHKの生放送で夜のネオン輝く路地裏界隈の竹瓦温泉から銀座裏（人情通り）のすばらしい映像が全国に映し出されました。放送終了後にはいろいろな所から反響があり大好評の番組でした。

しかし、翌日、地元観光関係の幹部の人が「あんな暗くて汚いところ映したら、別府のすべてがあんなのおもわれてしまう。本当に恥ずかしい。」と苦情の電話をいれたそうです。これを聞いて私は、地元の人が別府のよさを理解していないことが一番の問題であると思いました。

この話を、今回のシンポを企画した篠藤先生にしましたら、「(そういう観光関係の幹部の) あんなの頭の方がずーと恥ずかしい」といったことが印象的でした。(笑)

## 3 「歴史の香る路地裏」

### ・京都・奈良・そして別府

考えてみますに、このように路地が広範囲に碁盤の目のように整備されていて、それが残っているのは、全国的にみても少なく京都・奈良そして別府ぐらいしかありません。これは、別府が幸いにも戦禍の被害をうけていないということもあります。

別府を航空写真で上から見ると、路地がきれいな碁盤の目になっています。これは明治の終わりから昭和のはじめまで行なわれた大規模な耕地整理事業で完成したものです。当時は、今のような車社会を想定していなかったので約4m位の道幅で十分だったわけです。

いまでは再び「車優先から人優先の道路整備」へと見直されていて、路地は人のコミュニケーションのために理想的な道幅空間の見本でもあります。

### ・表と裏

世の中の物事は、表より裏の方が魅力的なことが多いようです。裏はミステリーで、何か少し怪しげな魅力があります。例えば、裏技・裏芸・裏話・裏工作等は週刊誌でよくとりあげられます。(笑)

狭い路地がいっぱいの別府の町並みは、町自体がすべて裏町・下町でもあります。つまり、別府は表も裏もない「表裏一体」の魅力いっぱいの町なのです。

### ・路地裏の人々

道幅が狭い分、人と人とのコミュニケーションをとりやすくなります。近所の人々の間にあいさつがあり人情味豊かな町です。こうした路地裏風景が、イタリアに留学していた人いわく、下町の雑多としたイタリアに似ているそうです。そういう下町にはいろいろな楽しい人がたくさんいます。夜の路地裏散歩で「流しのハッちゃん・ブンちゃん」がギターとアコーディオンで演奏して歌ってくれます。また、路地裏を大きなシャボン玉でいっぱいにしてくれる人がいます。さらに地元の人情味豊かな湯の町ママさんガイドも観光客を暖かく迎えてくれます。

## 4 「アイスクャンデーがうまかった」

### ・違いのわかる学生

別府大学の学生さんにこの路地裏ウォーキングの感想を聞くと「アイスクャンデーがうまかった」と一言いきました。初めは、私の説明は聞いてくれたのかな・・・と思いましたが、よくよく考えてみますと、この夏の暑い中を長時間にわたりいろいろ歩いて見て回り、たくさんの汗をかき、のどが渴いたときに、この冷たいアイスをお子さんのように歩きながら食べたので最高においしかったのでしょうか。この飽食の時代に昔ながらの手作りアイスクャンデーの味を理解する別府大学の学生さんは本当に「違いのわかる学生」なのです。

## 5 「まちづくりは、自分探し」

### ・あるものを生かす（歴史、文化、自然、物語等）

町の良いところ、悪いところを探すことは、自分自身の可能性を探すことと同じです。自分のわくを広げることで、いろいろな物事が多く見えてくる。私の趣味は写真で、いつでも路地を撮影していると、路地裏のネコともなかよしになれるし、日ごろ何気ない風景が実は非常に珍しいものであると気がつくことが多いのです。また、人から言われて初めて気がつくこともたくさんあります。

### ・子供からお年寄りまで

別府の町は、だれでも幅広く受け入れることができます。つまり、歴史と文化のあふれる非常に懐の深い町なのです。レトロな路地裏にはいろいろな所に共同温泉があり、お年寄りの方には懐かしくてやさしく、また若い人や子供には新鮮で楽

しく見える。みんなのニーズにこたえられる町だと思っています。

・人間性回復（人間らしさ、癒し、自由、健康）  
 都会の人は、路地裏の別府らしい生活空間の見える町を大変よろこびます。下町の日常の生活風景を見てほっとしたり、なにか安らぎを感じて人間らしくなれます。また、人情味豊かな人に出会い癒されたり、朝から温泉に入ったり、酒を飲む自由さもあります。さらにいろいろな温泉に入って心身ともリラックスして健康になれます。

このように人間性を回復できるすばらしい所は他にはないでしょう。

これからも、歴史の香る路地裏をPRしてみんなまで大切にしていきたいと思えます。

## 「中心市街地活性化と商店街」

別府商工会議所・  
 中小企業相談所 所長  
 伊藤 寛氏



### 【中心市街地の区域】

別府市の中心市街地の区域は、西はJR日豊線を境界とした海岸までと、南は浜脇から北は富士見通りまでを「中心市街地」の区域として別府市中心市街地活性化基本計画で定めています。

### 【人口の推移】

別府市のピーク時の人口は、昭和55年の国勢調査では約13万6千人でしたが、その後、毎年減少傾向にあり、現在、約12万5千人とピーク時に比べて約1万1千人減少しています。特に中心市街地を形成している南部地区の人口が大幅に減少しています。定住人口が減少することは、地域の購買力の低下に繋がり、ひいては、中心商店街の商

店が閉店に追い込まれる事態が生じてまいります。この結果として空き店舗が発生し、商店街の商業機能の低下と衰退を招くこととなります。人口の減少は、都市の存立基盤にも関わる社会的な問題として今後の大きな課題でもあり、住みたくなる街・住んでみたくなる街を如何に整備するのか、又、定住人口の増加を如何に図っていくかが求められています。

### 【商工業者の推移】

別府市の商工業者数は、平成8年の事業所統計調査(5年毎に調査)によりますと約7千9百ですが、過去10年間で商工業者は約1千1百減少しており、特に小売業は約460と全体の42%を占めており大幅に減少しています。経済環境等の変化に伴って企業の淘汰が進行し、商工業者は減少、更には経済のパイが収縮しており、地域の経済社会に与える影響は極めて大きく、今後、新たな産業の創出や新規企業への創業支援等に加え、新たな地域振興と活性化構想の構築が求められています。

### 【観光の動向】

別府市の観光客数は、平成12年度の別府市観光動態調査によりと、年間で約1,160万人で、ここ数年横ばいの状況で推移しています。この内、日帰客は約760万人と増加傾向にありますが、これは高速道路網の整備等によものと考えられます。一方、宿泊客約400万人と減少傾向で推移しており、この減少要因は、近年の観光ニーズや観光志向・形態の変化などによるものと思料され、今、別府観光は大きな転換期を迎えており、新たな「観光地づくり」への構築が求められています。

### 【商業の現況】

別府市内における商店街は15ありますが、この内、中心市街地には8商店街が存在し、524の商店が営業、73の空き店舗（空き店舗率12.2%）があります。一方、郊外には7商店街が存在し、416の商店が営業、21の空き店舗（空き店舗率4.8%）があります。特に中心商店街における空き店舗や空き地の発生と増加は商店街の商業集積としての機能低下を生じ、加えて商店街の衰退にも繋がり、更には「都市（街）の顔」としての機能喪失を招いています。

商業統計調査（3年毎に調査）による別府市の商店数は昭和63年の2,342をピークに減少傾向で推移し、平成9年の直近調査では1,738とピーク時に比べて604（25.7%）減少しています。また、年間販売額と売場面積は平成6年までは増加傾向で推移していたが、平成9年には年間販売額約1,212億8千万円、売場面積約15万1千2百㎡と減少に転じ、売場面積の約55%は大型店が占めており、商店を取り巻く商業環境は大きく変貌し、厳しい状況下にあると云えます。

#### 【中心市街地活性化法制定の目的とスキーム】

各地の都市中心地の空洞化が進行し、衰退している中心市街地の活性化を図るため、地域の創意工夫を活かしつつ、「市街地の整備改善」と「商業等の活性化」を柱とする総合的かつ一体的な対策を関係省庁、地方公共団体、民間事業者等が連携して推進することにより、地域の振興と秩序ある整備を図り、我が国の国民生活の向上と国民経済の発展を図ることを目的として「中心市街地活性化法」が制定（平成10年7月）されました。

#### 【中心市街地の現況と課題】

近年、中心市街地から郊外の西部・北部地域（新興住宅地）等への人口の移動・流出が著しく、特に中心市街地における定住人口の減少が進行し、人口は毎年減少傾向で推移しており、中心商店街の購買力の低下が商店街の衰退を招いているなど、中心市街地の定住人口の増加策が今後の課題とされています。

一方、中心市街地から別府市役所や国際観光港の郊外移転に加え、近鉄百貨店の撤退、更には大型店の郊外化、ロードサイドショップや新業態店の進展等、都市構造の変化が急速に進行し、公共施設等の郊外分散化に伴って、中心市街地の地盤沈下が商店街の衰退を招いていることから、商店街機能の充実を図りつつ、交流人口及び集客力を如何に高めるかも課題であります。

また、商店街は、消費者ニーズや環境変化への対応の遅れ、更には商店経営者自身の様々な問題等（経営者の高齢化、後継者問題等）を抱え、廃業・転業・移転等の事態により、近年、空き店舗・空き地が多発しており、中心商店街における商業の空洞化を招き、商店街全体の商業機能が低

下し、更には「都市（街）の顔」としての機能喪失に繋がる深刻な状況に直面しています。

#### 【中心市街地活性化への取り組みと現況】

別府市は、現下の厳しい中心市街地の活性化を図るため、平成11年に「別府市中心市街地活性化基本計画」を策定しました。本基本計画の策定を踏まえて、今後、TMO(中小小売商業高度化)構想、TMO計画の策定と云ったスケジュールで、これまでの「点」「線」から「面」的な商業活性化の整備事業が開始されることとなります。別府商工会議所では、基本計画の策定を踏まえて、平成12年度から「中心市街地商業活性化推進事業（コンセンサス形成事業）」に着手し、中心市街地の商業活性化に向けて鋭意取り組んでいるところです。

#### 【おわりに】

全国各地でみられる都市間・商業集積間競争の激化や中心市街地の空洞化などの環境変化に対応していくためには、地域商業の活性化を推進し、魅力的な都市（街）の形成を図り、地域の振興を支える、新たな「地域構想」の構築が極めて重要であります。

「まちが人を育て」「人がまちを育てる」ものです。厳しい環境変化に適応し、都市が進化していかなければ、都市の発展・繁栄はあり得ないのです。学生の皆さんは、これから常に何事にも問題意識を持って積極的にチャレンジし、有意義で実り有る学生生活を送られ、立派な社会人となれることを期待しています。

#### 「温泉・観光・まちづくり」

大阪明浄大学観光学部  
浦 達雄 教授



私の専門の観光地理学で、直接まちづくりを研究している訳ではありません。しかし、調査で旅館や商店に行きますと、最後になって「どうすればお客が来るのか、お金が儲かるか」ということをよく聞かれました。そこで考えたことは、ただ調査して現状分析に終わるだけでは研究ではないと思い、20年程前から調査をした場合、街はこうあるべきだという提案をするようにしました。

### 1. 高度成長期のまちづくり

まず高度経済成長期ですが、観光や温泉の観点からいくと、まちづくりということは、ほとんどしていませんでした。旅館に限れば、大きなものをつくり「大きいことは良いことだ」をキャッチフレーズにして日本全国に大きな旅館ができました。当然、高度経済成長期なので、自由競争社会です。簡単に言うと、自分だけ良ければ良い、他はどうでも良いという発想が主流を占めました。旅館業者を非難することはありませんが、囲い込みということで、いったん入れたお客は外に出さず、おみやげ物屋までホテル内に作る、ラーメン屋を作る戦略が流行りました。別府も修学旅行や新婚旅行などで賑わっていた時期です。

私も高校2年の時、修学旅行で別府に来ましたが、街のことはさっぱり覚えていません。覚えているのは、観光スポット（素材）くらいです。別府に来ることが目的ではなく、たまたま温泉があって、大きな旅館があるということくらいで、単なる宿泊拠点だったのです。当時は、男性社会でしたから「酒と女とどんちゃん騒ぎ」で温泉に身体を治しに来たのではなく、悪くして帰ったという時代で、とてもまちづくりという発想はありませんでした。

### 2. 安定経済成長期のまちづくり

それが今度、石油ショックでお客が減ってきました。別府はアフリカンサファリで大丈夫でしたが、一般的に、安定経済成長期でお客が減ってきて、やっとまちづくりの発想が出てきました。2つのパターンがあり、ひとつが、昔ながらの開発（ハード）中心のまちづくりです。別府は日本3大温泉地と言われ、繁栄しましたが、だんだんお客は減り、“夢よもう一度”あと“こんなはずでは…”ということもあったのですが、そのほ

とんどが失敗に終わりました。

もうひとつが、由布院に代表されますが、今度は発想を変えた新しい言葉で「まちおこし」ができました。まちおこしでは、今までお客が振り返らなかった山間の温泉地が人気を集めました。地域性（地域の特性、個性だとか）をシンボルとして活かしたまちづくりをしたのです。それしかなかったということもありますが、地域の性格（地域性）、“らしさ”を活かしたのです。

### 3. 21世紀のまちづくり

次は、これからのまちづくりです。別府でも竹瓦倶楽部などの活動で21世紀のまちづくりが始まっております。これからはハート（心）の時代です。ハードやソフトはほぼ何処へいっても同じです。マニュアル化されたものではなく、本当の気持ちでおもてなしをすることです。建物や経営はどこへ行っても同じですが、気持ちは違います。これはものすごく差がでます。ハートは観光や福祉でも何の世界でも同じで、相手のことを考えて対応するべきだと思っています。また本物の時代ということで、いいかげんな気持ちでサービスをしてはいけません。別府の温泉は本物の温泉（源泉）ということで、これからは本物を求めて来る人が増えるでしょう。

“まちづくり”だと、昔ながらのハード・建物だけをつくるという感じがしますので、これからは“まちづかい”という言葉を使いたいと思います。今まではお金を使って、ものを作っていましたが、これからはお金を使わないでアイデアを投入する訳です。

さらに「まちづかい」による「まちづくり」は、要するにものを新しく作るのではなく、古いものをなおして使うことが大切です。ヨーロッパなどをみてもほとんどが修復型であり、これからは地域にあるものを守りながら活かすという考えが大切です。観光は専門家不在で、誰でも取り組むことができ、簡単です。

私が、これからの別府の観光活性化に対して、第一に思うことは、地域のシンボルの観光化です。歴史や文化から蓄積されたものを採りだして、シンボルをたくさんつくりあげて、披露することです。もう一つですが、別府の観光性は都市型観光（アーバンツーリズム）にあると思います。その





代表が街歩きです。平松知事は、観交（観光と交流）という言葉を使っていますが、街歩きは、まさに観光と交流の接点なのです。

中心市街地の活性化ですが、そのキーワードは、やはり街歩きだと思います。これからは、自分たちが地図をみて、自分の足で回るというのが増えるという気がします。それから、そこに住んでいる人たちが楽しむということも重要です。自分たちが楽しければ、他所から人がたくさん寄ってくるので、先ほど言ったように地域のシンボルを活用すると、その効果は大きいということです。さらには、「自分だけよければ悪い」という発想、地域の運命共同体と言う考え、お互いに助け合っていく姿勢が大切です。

また、私が以前に調査したファッションタウン（原宿や代官山など）から学んだことは、個店の頑張りです。時代を読んだ自己主張型の店が大事であり、他力本願では駄目なのです。自分ならばどうするか、自分はこの程度できるという取りかかりが重要です。街中に人の流れを呼び込むためには、歩いて楽しい街歩きの環境整備が大切です。ただ歩くというのはよくありません。的確な情報提供、駐車場やトイレが明記された地図などがあるとよいでしょう。出来れば駐車場は無料にして頂きたいですね。本日の結論は、まちづくりからまちづかいへです。古いものを生かして、自分たちの出来ることから取り組むということです。学生さんはぜひ卒業論文に郷里ではなく、別府の調査研究をして頂きたい。資料も沢山ありますし、一番良いのはすぐ調査にいけることです。



## VI 後期は学生自身が調査・研究

このようにシンポジウムでは、まちづくりに関

連する体験や情報を学生は得てきました。そこで、後期の授業では、学生が自らテーマを決めて街に出て行き、調査・研究をする予定です。今のところ、学生から出ている希望では、次のようなテーマ・内容が上がっています。

### 1. 商店街の研究

歩行者アンケートを実施しながら、訪問者から見て中心市街地の商店街の課題を調査し、また、自ら出店計画を立ててみる。

### 2. 飲食店・ホテルの調査

飲食店・宿泊施設での聞き取り調査などから街の課題、また、それぞれの取組みを研究する。

### 3. インターネットとまちづくり

「別府八湯メーリングリスト」などに参加し、また、いろいろなホームページにアクセスしながら、まちづくりにインターネットがいかに生かされているかを研究する。

### 4. 学生アンケート

大学町として変貌を遂げつつある別府市だが、大学生の目から見た市街地の魅力、問題点を調査する。

### 5. バリアフリーの調査・提言

別府市で作成された福祉マップをもとに、中心地のバリアフリーを調査する。

### 6. 道路事情

道路の状態を車両交通だけでなく、生活空間、ウォーキングなどの観点からもう一度見直す。

### 7. 中心市街地と温泉

特に、共同浴場を中心とした生活文化としての温泉を研究する。

### 8. 中心市街地の歴史

旧別府村の歴史を中心に調査する。

### 9. 人物調査

高齢者の方などのライフヒストリーを調査し、個人史を通して社会の変遷を学ぶ。

1年生の取組みであるので、基礎的なことしかできないであろうが、現場に出て考える体験を積んでほしいものです。また、街の様々な人々と知り合う中で、生きた「人間関係」を学ぶことを担当教員として願っています。